

信長研究の最前線～長篠合戦図屏風を通して～

座間総合高等学校 高橋 俊介

はじめに

織田信長といえば書籍や雑誌をはじめTVでも取り上げられることが多く、日本史の授業で取り扱う人物の中でも、とりわけ関心の高い人物の一人である。信長は一般的に革新的な人物として広く認識されていることは言うまでもない。現行の日本史B教科書においても、信長は統一事業をすすめるために新しい政策を実施した革新的な人物として登場してくる。

しかし、近年の研究では信長の強い革新性などは否定されつつある。信長の研究者や戦国史研究の研究者から革新的な「信長像」に否定的な見解が示されており〔池上裕子 2012、谷口克広 2013、神田千里 2014〕、北条氏を中心とする戦国大名の研究で知られる黒田基樹氏は「戦国大名と比較した場合、大きな違いはない」〔黒田基樹 2014〕とまで主張されている。また、一昨年出版された日本史史料研究会編『信長研究の最前線』は、研究者と一般の歴史愛好者との認識差を縮めようと、最新の研究成果に基づいてテーマごとにわかりやすく信長の実像に迫ったものである。このような研究動向をうけて、歴史教育の立場から新しい「信長像」をどのように教えるか考えていく必要がある。

本報告では、戦前からどのようにして「信長像」が定着したのかを探り、革新的な「信長像」を説明する上で重要な長篠の戦いに焦点をあて、授業における信長のあつかい方を最新の研究成果と照らし合わせて検討する。長篠の戦いについては1970年代から通説批判の動きがあるものの、管見の限り小学校・中学校・高校のすべての教科書や資料集にほとんど通説通りの記述がなされている。さらに、「信長像」を強調するように長篠合戦図屏風が図版として必ず掲載されている。新しい「信長像」を教える際に、長篠の戦いをどのようにあつかえばいいのか、図版・研究・歴史教育の3つの視点から考察する。

I. 「信長像」と長篠の戦い

1. 現在の「信長像」とは

現在の革新的な「信長像」について述べたものを戦前にまでさかのぼると、東京帝国大学史料編纂官で同帝大教授にもなった田中義成の『織田時代史』がある。本書は田中本人が書いたものではなく、彼の没後に弟子たちがその講義ノートをもとめたものが著作として1924年に出版されたものである。そこでは「信長の幕府を廃し皇室を奉戴して、海内統一の計画をなせしは、鎌倉以来四百年の習慣を打破せる一大革新なりき」とあり、幕府を廃して皇室を奉戴した信長が国内統一をはかったことが革新的な業績だったとし、勤王家で革新者としての信長が登場する。また、1919年に初版発行されてからベストセラーとなった徳富猪一郎（蘇峰）の『近世日本国民史・織田時代史』や大正期の小学校の教科書でも信長は勤王家として登場するとともに、ヨーロッパから伝来した新兵器の鉄炮をいち早く導入して新しい戦術を生み出した人物として述べられている。以上のことから、田中が東京帝国大学で講義をしていた明治後期から大正前半には革新的な「信長像」が学界にも広まっており、大正時代前半には世間にも広く定着しはじめたと考えられる。この頃には歴史教育を通じて、こうした「信長像」は広まっていったと考えられる。

戦後になると勤王という価値観が覆され、「信長像」にも勤王の要素はなくなった。しかし、戦後に今井林太郎氏が信長を「近世の扉を開いた改革者」「古代・中世的権威の否定にその本質がある」〔今井林太郎 1963〕と評価して、中世を破壊した強い革新性を持つ「信長像」は引き継がれていった。その後も信長研究は次々と発表されてきた。そして、近年の信長研究の進展で「信長像」は大きく変

わってきた。

さて、現行の高校日本史の教科書（山川出版社『詳説日本史B』）では、信長について「機動的で強大な軍事力をつくり上げ、すぐれた軍事的手腕でつぎつぎと戦国大名を倒した」「伝統的な政治や宗教の秩序・権威を克服することにも積極的」「都市や商工業を重視する政策を強く打ち出していった」と記述されている。歴史教育においても、軍事のカリスマ、強力な政治権力者、流通・都市政策の独自性といった点から革新的な「信長像」が著述されていることが分かる。

2. 長篠の戦いの評価—軍事のカリスマなのか？

『信長研究の最前線』では「政治権力者としての実像とは」「信長は軍事のカリスマか」「信長の経済・文化政策は特筆されるか」という3部構成の計14テーマから信長の実像に迫っている。そのうち「軍事のカリスマか」では、信長の軍事史にスポットをあてている。信長の軍事史といえば、かなりの兵力差がありながら大軍の今川軍を打ち破った桶狭間の戦い、新兵器の鉄炮を用いて武田軍に勝利した長篠の戦いに代表されるであろう。これらの戦いは、革新的な「信長像」を構成する要素でもある。しかし、どちらの合戦もこれまで二次史料を多用し、あやふやな論証がすすめられてきた感があるという。

まずは、長篠の戦いの通説を確認したい。『国史大辞典』を引くと「鉄炮の組織的活用の画期がこの戦いであった。信長は鉄炮隊を三段に重ねて、第一列の兵は射撃のあと後ろにさがり、第二列、第三列が撃つ間に弾を込めるといのように、連続的に火縄銃を使用する戦法をみだした。この戦法の大成功により、武田氏に代表される騎馬中心の戦法から鉄炮主体の戦法へと戦の主流が移った」とある。これがいわゆる信長が「大量の鉄炮（三千挺）」を用いた「新戦術（三段撃ち）」で武田の「騎馬隊」を打ち破ったとする通説である。このように長篠の戦いは、新兵器を導入して新しい戦術をもって騎馬隊に勝利し、戦国時代の戦法も変えてしまった。信長が“軍事のカリスマ”であることを象徴する戦争だったということが分かる。しかし、後述するように1975年から藤本正行氏や鈴木眞哉氏らによって通説批判が行われており、学界や研究者の間ではそれなりに受け入れられてきている感がある。それにも関わらず、現行の日本史B教科書は通説批判による最新の研究成果が十分反映されているとは言い難い状態である。

II. 「長篠合戦図屏風」を読む—図版

1. 「長篠合戦図屏風」の伝来・製作

今日まで約70作例が確認されている「戦国合戦図屏風」とよばれる作品群の一つとしてあつかわれ、その中でも作品数が最も多いものが「長篠合戦図屏風」で、現在12作品が知られている（資料1）。そのうち、教科書や資料集に掲載されている作品は、徳川美術館蔵の「徳川家本」である。また、製作がもっとも古いとされる作品は、名古屋市博物館蔵の「名古屋市博本」で17世紀初めの作品とされる。1980年に中央公論社から出版された『戦国合戦図屏風集成』第1巻では、川中島合戦図と合わせて長篠合戦図が紹介され、その概説を担当した渡辺武氏は、犬山城白帝文庫所蔵の「成瀬家本」が「徳川本」と大阪城天守閣蔵の「大阪城本」の原本であることと、これらの屏風絵が「名古屋市博本」を参考に新たな構想で製作したものと指摘した〔渡辺武1980〕。内田九州男氏は同書の論考で代表的な場面描写を比較し、「成瀬家本」・「大阪城本」・「徳川家本」の順に成立したとする。さらに、松浦史料博物館蔵の「松浦家本」は平戸藩主松浦静山の命によって、1825～26年に「成瀬家本」を写させて製作されたものであることも紹介している〔内田九州男1980〕。のちに高橋氏によって長浜城歴史博物館蔵の「長浜城本」と豊田市郷土資料館蔵の「豊田市本」も「成瀬家本」の写本であることが

明らかにされている〔高橋修 1997、2002〕。

「長篠合戦図屏風」の製作背景について、高橋修氏は「成瀬家本」が尾張藩家老の成瀬家によって先祖の勲功を「賛歌」するために製作されたとする〔高橋修 2001〕。いっぽうで、原史彦氏は「徳川家本」の製作時期に関する検討をおこなうなかで、唯一黒漆の具足と頬面を付けた本多忠勝に注目した。これに加えて藤本氏もすでに指摘していたが、徳川家の一武将である忠勝が大将の織田信長・徳川家康・武田勝頼と同様に貫を履く姿で描かれており、「徳川家本」以外の諸本では忠勝が目立つことは不都合であったため、改変されたと推定された。そのほかに忠勝の家臣原田弥之助の軍功が描かれていることや本多家の重臣中根家に「長篠合戦図屏風」の先行作品が本多家周辺に存在したことを示す記録も示された。その上で、「長篠合戦図屏風」の原本となる作品は本多家周辺で製作されたと推定し、「徳川家本」と「成瀬家本」との間に転写関係はなく、別個に本多家の作品を写したものと仮定された〔原史彦 2010〕。

いずれにせよ「長篠合戦図屏風」の製作年代は、合戦からかなりの時間が経過したのちに徳川家や徳川家臣の家祖を顕彰する目的で製作されたもので、本来は革新的な「信長像」を描くものではなかった。

2. 内容

「長篠合戦図屏風」を見ると、通説にあるような織田軍による鉄炮の「三段撃ち」や武田軍の「騎馬隊」は描かれていない。織田・徳川軍の三万八千人に対し、武田軍の一万五千人というのも表現されているとは言い難い。もっとも「長篠合戦図屏風」に描かれる軍勢配備の根拠となる文献については、内田氏が『戦国合戦図屏風集成』の論考の中で検討されている。それによれば、織田・徳川連合軍の配置は小瀬甫庵『信長記』（以下、『甫庵信長記』）が使用され、一部は『松平記』に基づくという。また、武田軍の配置は『甲陽軍艦』に依拠していることを明らかにされている〔内田九州男 1980〕。

一方で、藤本氏は「豊田市本」だけ徳川軍の銃兵の中に、武田軍の援護射撃で撃ち倒された者がいることを発見された〔藤本正行 2010〕。武田軍にも鉄炮隊が存在したことをうかがわせるものである。また、平山優氏は「三段撃ち」の解釈について、「三段」の配置は鉄炮衆だけで編制された部隊を三カ所に配置したという意味として通説を補強する解釈をされた〔平山優 2014〕。しかし、藤本氏は平山氏の解釈を否定し、「“絵画史料”である以前に、鑑賞のため（顕彰の意味も含む）に描かれた“絵画作品”である」として絵画を読む難しさを指摘している〔藤本正行 2015〕。

長篠の戦いに関する合戦図屏風・合戦屏風絵一覧						資料1
番号	作品名	形態	推定製作年代	所蔵	備考	伝来
1	長篠・小牧長久手合戦図屏風	六曲一双	17世紀後半	犬山城白帝文庫	左隻は「小牧長久手合戦図屏風」 「長篠合戦図」では成瀬家の祖成瀬正一を特徴的に描く 「小牧長久手合戦図」では成瀬正成が二度登場する	成瀬家(尾張藩)
2	長篠・小牧長久手合戦図屏風	六曲一双	江戸後期	犬山城白帝文庫	1の副本、左隻は「小牧長久手合戦図屏風」 1800年頃に製作か	成瀬家(尾張藩)
3	長篠・小牧長久手合戦図屏風	六曲一双	1825～26年	松浦史料博物館	左隻は「小牧長久手合戦図屏風」 平戸藩主松浦静山が旧知の成瀬正寿から借覧し、製作	松浦家(平戸藩)
4	長篠・小牧長久手合戦図屏風	六曲一双	江戸中期	大阪城天守閣	左隻は「小牧長久手合戦図屏風」	不明
5	長篠・小牧長久手合戦図屏風	六曲一双	18世紀後半	徳川美術館	左隻は「小牧長久手合戦図屏風」 「長篠合戦図」では本多忠勝の描かれ方が強調 「小牧長久手図」では井伊直政の描かれ方が強調	尾張徳川家
6	長篠・小牧長久手合戦図屏風	六曲一双	江戸後期	豊田市郷土資料館	左隻は「小牧長久手合戦図屏風」 成瀬家から渡邊家に養女となった姫君ゆかりの資料 渡邊守綱の活躍を強調	寺部渡邊家(尾張藩) 浦野家
7	長篠・小牧長久手合戦図屏風	六曲一双	江戸後期	長浜城歴史博物館	左隻は「小牧長久手合戦図屏風」	不明
8	長篠合戦図屏風	六曲一隻	江戸前期	名古屋市博物館	元々一対だった可能性大(右隻現存せず)	不明
9	長篠合戦図屏風	八曲一隻	江戸後期	徳川美術館	5の図様を左右に引き伸ばすようなかたちで再構成	尾張徳川家
10	長篠合戦屏風絵	六幅	江戸後期	東京国立博物館		木挽町狩野家
11	長篠合戦屏風絵	八幅	江戸後期	東京国立博物館	長久手合戦屏風絵(東京国立博物館蔵)と一対か 徳川家斉の命で幕府奥絵師木挽町狩野家が制作したものの下書 1、2をもとに描いたか	木挽町狩野家
12	長篠合戦屏風絵	六幅	江戸後期	中津城	1の写しか	奥平家(中津藩)

Ⅲ. 長篠の戦いの研究状況

1. 通説のはじまり

長篠の戦いの通説についてはすでに確認したとおりであるが、どのようにして通説となったのか簡単に整理したい。平山優氏は「長篠合戦は、有力な騎馬隊を擁する武田軍が、鉄炮を多数装備し、三段撃ちの戦術を導入した織田・徳川軍に、撃破されたという通説」として、参謀本部編『日本戦史・長篠役』（1903年）によるとされる一方、1938年に発表された渡邊世祐「長篠の役」（『大日本戦史』第三巻所収）によって形作られたとする〔平山優 2014〕。それに対して、藤本正行氏は『日本戦史・長篠役』に書かれている長篠の戦いに関する記事の典拠が『総見記』であることに注目し、通説になるうえで絶大な役割をはたしたのは『総見記』であるとの見解を示した。『総見記』は1685年に幕臣の遠山信春が『甫庵信長記』を増補改訂したもので、鉄炮三千挺三段撃ちの始まりは『総見記』の底本である『甫庵信長記』の記事がもとになっていると推定されている。ただし、『日本戦史・長篠役』が『甫庵信長記』に全く触れていないことも指摘している。さらに、藤本氏は通説を広めたのは、徳富蘇峰『近世日本国民史・織田氏時代』とする。同書の長篠の戦いの記事が『日本戦史・長篠役』と似ていることから、それを孫引きしたか蘇峰が直接『総見記』を読んだと推定している。いずれにせよ、当時は初版から半年足らずで十五版も出たベストセラーだったことを根拠にしている。前述の田中義成の『織田時代史』にも信長の鉄炮戦術のことが述べられていて、戦術史上で画期的なことだったと評価されている〔藤本正行 2015〕。以上のことを踏まえれば、大正時代中頃に通説として世間に定着していったと考えられよう。

2. 通説批判

通説の鉄炮隊については、1975年に鈴木眞哉氏と藤本正行氏の両氏がほぼ同じタイミングで長篠の戦いの通説批判を展開した。信長の新戦術が常識的に不可能ではないかと考えたことが通説を疑うきっかけになったという。藤本氏は、1980年代には通説の三段撃ちは非現実的であると指摘しつつ、良

質で信頼性の高い史料として評価が高い『信長公記』には三段撃ちに関する記述がなく、誇張や創作して書かれている部分も見られることが指摘され、史料としての信頼性に不安のある『甫庵信長記』が典拠であったことから、三段撃ちを否定された。また、織田軍が投入した鉄炮三千挺についても疑問を呈した。まず、長篠の戦いに関する記述のある太田牛一自筆の『信長公記』は、建勲神社所蔵本と岡山藩池田家に伝来した岡山大学附属図書館所蔵池田文庫本との2種類がある。そして、建勲神社所蔵本では「鉄炮千挺」と書かれているのに対し、それよりもあとに成立したと推測される池田文庫本では、同じく「千挺」と書かれる右上に「三」と書き加えられ、「三千挺」と訂正したようになっている。藤本氏はこの訂正が牛一によるものではなく後世の人によるものとしている。ただし、あくまで佐々成政や前田利家らの五人に預けられた鉄炮数が千挺で、織田軍の全鉄炮数は不明としながらも、その千挺以外に鉄炮が存在して戦況に応じて追加投入されたと推定している〔藤本正行 2010、2015〕。

通説の武田軍の騎馬隊については鈴木真哉氏が最初に疑問を呈した。鈴木氏は、戦国時代において騎乗できる者は多くが指揮官・士官クラスで、戦国大名が家臣に賦課した軍役に関する史料を見る限り騎馬数が多くないことから、騎馬隊を編制することは困難であると主張した。また、宣教師のルイス・フロイスの記述などから、日本では騎乗しての戦闘は限られた場面のみしか騎乗しての戦闘は行われなかったとし、武田軍は騎馬武者だけで編制される騎馬隊も持っていなかったと騎馬隊を否定した〔鈴木真哉 2011〕。

以上の通説批判を受けて、平山優氏は鉄炮数や騎馬さらには三段撃ちの通説を補強すべく再検討を試みるが、さらに藤本氏もその通説批判の批判に応えるかたちで自身の主張を展開している。

3. 長篠の戦いまでの政治状況、勝因

藤本氏と鈴木氏が行った通説批判が一定の支持をえるようになってきたことをうけ、近年は長篠の戦いにおける政治背景をめぐる研究も進んでいる。柴裕之氏は、武田勝頼の三河侵攻が領国の境目に存立する国衆（山家三方衆）間の内紛を解決して武田領国の存立を保持するためのものとし、畿内の將軍足利義昭勢力や大坂本願寺・一向一揆との連携、さらに徳川家の内紛に呼応して実施されたもので、この軍事行動の帰結が長篠の戦いであると位置づけた〔柴裕之 2010〕。また、小笠原春香氏は、長篠の戦いの前年にあった長島一向一揆壊滅に注目し、信長がこれを壊滅させたことで勝頼の遠江侵攻の際に実現できなかった徳川氏への軍事的支援を長篠の戦いでは実行することができたとした〔小笠原春香 2015〕。これらに加え、織田・徳川連合軍約三万八千人に対する武田軍は約一万五千人と際立つ兵力差や武田軍は長篠城の城攻めも行っていったこと、両軍の布陣や武田軍側の情報収集不足、織田・徳川連合軍の別働隊の活躍などさまざまな要素が重なった結果、織田・徳川軍が勝利を収めることができたと考えられよう。なお、長篠の戦い自体は信長と勝頼の戦いと評価されることが多いが、実際には徳川氏と武田氏との境目争いであり、信長はあくまで家康の援軍として出てきたに過ぎない。こうした見方も少しずつ浸透してきている。

IV. 歴史教育における長篠の戦い

1. 現行教科書の記述と長篠合戦図屏風（資料2）

現行の小学校・中学校・高校のすべての教科書で、「長篠合戦図屏風」を掲載して通説に関わる何らかの著述がされている。小学校の教科書では、見開き1ページで大々的に「長篠合戦図屏風（徳川家本）」を掲載している。高校の教科書でも、一部分ではあるが必ず「長篠合戦図屏風（徳川家本）」の図が掲載されている。最新の研究成果はあまり反映されず、従来信長像を説明しやすい通説に引

きずられているかたちで記述されている。こうした状況のなかで、生徒は高校までに三度にわたって革新的な「信長像」や長篠の戦いの通説について学習をすることになる。

高等学校日本史B教科書に見える長篠の戦いの記述一覧				資料2	
書名	発行者	著作者	検定 済年	長篠合戦に関する記述(本文)	長篠合戦に関する記述(図版解説)
新選日本史B	東京書籍	小風 秀雅 ほか9名	平25	1575(天正3)年には、甲斐の武田勝頼を鉄砲をたくみに使った集団戦法でやぶった(長篠の戦い)。	武田軍の騎馬隊を、信長の鉄砲隊がやぶった。鉄砲は、それまでの戦い方を大きく変えることとなった。
高校日本史B	実教出版	君島 和彦、加藤 公明 ほか14名	平25	1575(天正3)年、三河の長篠の戦いで、信長と徳川家康は、鉄砲を活用して信玄の子武田勝頼を討ちやぶった。	左方が織田・徳川連合軍で鉄砲を中心とする歩兵、右方の武田軍は刀・槍を中心とする騎馬武者を主力とする戦法として描かれている。
日本史B	実教出版	脇田 修、大山 喬平 ほか14名	平25	1575年に甲斐の武田勝頼を長篠の戦いでやぶり (脚注)織田信長が武田勝頼の騎馬隊をやぶった長篠の戦いは、鉄砲隊の威力を示したものと知られる	左方が織田・徳川連合軍で鉄砲隊を中心とする歩兵、右方の武田軍は刀・槍を武器とする騎兵中心の戦法をとっている。
高等学校 日本史B 最新版	清水書院	荒野 泰典、伊藤 純郎、 加藤 友康、設楽 博己 ほか7名	平25	最新兵器の鉄砲を大量に導入して、1575年の長篠の戦いでは武田信玄の子勝頼の騎馬隊を鉄砲の威力で打ち破った。	信長・家康軍は、1,000挺以上の鉄砲を備え、それを馬防柵の内側に配置して一斉射撃をおこない、武田軍を破った。
新日本史B	山川出版社	大津 透、久留島 典子、 藤田 覚、伊藤 之雄	平25	さらに1575(天正3)年、武田信玄の死後、武田家を継いだ勝頼を三河の長篠に破った(長篠合戦)。	長篠合戦において、織田・徳川の連合軍は、図の右から攻撃する武田軍を破ったが、この戦いでは鉄砲隊も威力を発揮したといわれる。
高校日本史B	山川出版社	笹山 晴生、佐藤 信、 五味 文彦、高埜 利彦 ほか9名	平25	1575(天正3)年には、三河の長篠合戦で多くの鉄砲を使って武田氏の騎馬軍団を破り	長篠合戦において、織田・徳川の連合軍は、鉄砲隊の威力で図の右手から攻撃する武田の騎馬軍団を破った。図の中央を流れる連吾川の左手からいっせいに射撃している。
詳説日本史B	山川出版社	笹山 晴生、佐藤 信、 五味 文彦、高埜 利彦 ほか10名	平24	1575(天正3)年の三河の長篠合戦では、鉄砲を大量に用いた戦法で、騎馬隊を中心とする強敵武田勝頼の軍に大勝利	長篠合戦において、織田・徳川の連合軍は、鉄砲隊の威力で図の右から攻撃する武田の騎馬部隊を破った。
最新日本史	明成社	渡部 昇一、小堀 桂一郎、 國武 忠彦 ほか20名	平24	天正三年(一五七五)、信長は三河の長篠で武田勝頼の率いる騎馬隊と戦い、鉄砲足軽隊を活用した新戦法で壊滅的な打撃を与え(長篠合戦)	左が織田・徳川連合軍、右が武田軍。

2. 教科書に登場する長篠の戦いの記述の変遷

戦前の歴史教育では、長篠の戦いはどのようにあつかわれていたのだろうか。長篠の戦いが教科書に初めて登場するのは、管見の限り明治43年の文部省『高等小学日本歴史』で「長篠合戦」の挿絵である。次に、大正元年の『新編日本歴史教科書』（三省堂書店）では「長篠戦争の図」という挿絵に「当時戦争に鉄砲を用い柵を構へし状を見るを得べし。」という図版解説が記述される。大正15年の『中等日本史』（大日本図書株式会社）や『中等教科 日本歴史教科書』（三省堂書店）では、教科書本文にも新兵器「鉄砲」による勝利と武田軍の大敗の記述が登場する。この時期は、前述したように学界においても長篠の戦いの通説が定着していった時期である。また、昭和7年の『新制国史』（六盟館）では執筆者の渡邊世祐が長篠の戦いを「戦術の革新」として位置付け、「長篠合戦図屏風」の「徳川家本」が掲載されている。

戦後には、昭和26年の『現代日本のなりたち』（実業之日本社）で、より明確に「騎馬武者」（古い戦闘様式）VS「鉄砲足軽」（新しい戦闘様式）という図式で記述されるようになる。同年の『日本史』（山川出版社）では、「長篠合戦図屏風」の「徳川家本」が掲載されるようになる。

おわりに

以上、新しい「信長像」を教える際に、長篠の戦いをどのようにあつかえばいいのか、図版・研究・歴史教育の3つの視点から考察してきた。教科書や資料集に必ず掲載される「長篠合戦図屏風」をどのように扱うか難しい問題である。信頼における『信長公記』との比較、製作背景の考察、「信長」よりも「徳川」の合戦図といった視点で読み解いていく必要がある。そこで分かったことは、改めて史料の重要性が強調された。教材研究においても、一次史料や信頼における史料に裏付けされた研究

の把握、教員側の史料の選択が重要となる。また、生徒に長篠の戦いの通説と通説批判の比較をさせてみるのも面白いと思う。

本報告では、新しい「信長像」を授業でどのように教えるかという問題提起に終わってしまった感が否めないが、新しい「信長像」をさまざまな視点からの教材化していく必要があることは確かである。また今回は長篠の戦いの古戦場に足を運ぶ機会があった。改めてフィールドワークの重要性を認識するとともに、このような成果を授業に反映させたいと考える。

《参考文献》

今井林太郎「信長の出現と中世的権威の否定」（『岩波講座日本歴史9』岩波書店、1963年）

池上裕子『織田信長』（人物叢書）吉川弘文館、2012年

小笠原春香「長篠合戦試論—長島一向一揆との関連から—」

（学位論文『戦国大名武田氏の外交と権力』2015年）

神田千里『織田信長』（ちくま新書）筑摩書房、2014年

黒田基樹『戦国大名 政策・統治・戦争』（平凡社新書）平凡社、2014年

桑田忠親他編『戦国合戦絵屏風集成 第一巻 川中島合戦図 長篠合戦図』中央公論社、1980年

（渡辺武、宮島新一、内田九州男、桑田忠親氏の解説および論考を収める。）

柴裕之「長篠合戦再考—その政治的背景と展開」（『織豊期研究』12号、2010年）

鈴木眞哉『鉄炮隊と騎馬軍団』（歴史新書y）洋泉社、2003年

鈴木眞哉『戦国軍事史への挑戦』（歴史新書y）洋泉社、2010年

鈴木眞哉『戦国「常識・非常識」大論争!』（歴史新書y）洋泉社、2011年

高橋修「戦国合戦図屏風の成立と展開—成瀬家蔵「長久手合戦図屏風」とその周辺—」

（歴史学研究会編『戦争と平和の中近世史』青木書店、2001年）

高橋修「「長篠合戦図屏風」を読む」（堀新編『信長公記を読む』吉川弘文館、2009年）

谷口克広『信長の政略—信長は中世をどこまで破壊したか』学研パブリッシング、2013年

原史彦「長篠・長久手合戦図屏風の製作背景」（『尾陽』第六号、思文閣、2010年）

平山優『検証 長篠の戦い』（歴史文化ライブラリー）吉川弘文館、2014年

平山優『長篠合戦と武田勝頼』（敗者の日本史9）吉川弘文館、2014年

藤本正行『信長の戦国軍事学』JICC出版局、1993年（のち『信長の戦争』講談社学術文庫、2000年）

藤本正行『長篠の戦い—信長の勝因・勝頼の敗因』（歴史新書y）洋泉社、2010年

藤本正行『再検証 長篠の戦い—「合戦論争」の批判に答える』洋泉社、2015年

新城市設楽原歴史資料館編『古戦場は語る 長篠・設楽原の戦い』風媒社、2014年

日本史史料研究会編『信長研究の最前線』洋泉社、2014年

『戦国合戦図屏風の世界』和歌山県立博物館、1997年